

A 47 / 18

世界史教育における地図資料の活用

— 中世ヨーロッパの心性を理解するための地図読解 —

荒井雅子 (立教新座中学校・高等学校)

キーワード 地理歴史科教育 世界史 教材開発 ヘレフォード図

本研究は、ヨーロッパ中世の古地図(ヘレフォード図)の教材化を試みた。古地図には聖書に基づいた記述だけでなく、ギリシア・ローマ時代からの知識、歴史、近代的な地図としての整合性など、多岐にわたる要素が盛り込まれており、それらを整理して提示することで、中世の宗教観や世界観を体感できる主題学習の教材としての利用が可能になった。

1 はじめに

本研究は、新学習指導要領の指針に基づき、世界史Bにおける主題学習に利用可能な古地図による教材を開発することが目的である。歴史教育においては資料の活用が求められる一方で、世界史分野においては言語や史・資料の制約から、史料を読む機会が少ないと感じている。言語の制約を気にせず利用できる資料として絵画や古地図があるが、古地図は時代や地域によって表現に制約があり、特に中世の地図はキリスト教的価値観に支配され利用しにくい¹。しかし、このような地図の不完全さを利用することで背景にある心性を説明することができると考え、イギリスに残るヘレフォード図²を使い、古地図の教材化を試みた。本論文では、教材化への手がかりになるであろう古地図読解の視点を提示するとともに、ともすれば馴染みのない、様々な図像への解説を試みる。

2 教材化への視座

地図の研究史における欧州中世は、古代以来の知識が活かされていない、キリスト教的価値観に支配されたために描写にゆがみが発生したなどの視点から地図としての評価が低い。岡崎もこの指摘に従い、ヘレフォード図にはキリスト教化された伝統的世界像・図像化された普遍史・中世的な三重構造の世界が描かれているという³。しかし、ヘレフォード図には近代的な地図につながるような現実に忠実な要素も描かれている。今回は、岡崎の分析を援用しつつ、ヘレフォード図の特徴として以下の4つの要素をまとめ、それぞれにつながる図像を地図の中から抜粋し、それらを利用することで中世の心性に至る歴史認識を養えるようにした。心性とは個々人の意識を超えた、人々の集合意識であるという。ここではハンス＝ヴェルナー・ゲッツの指摘に従い、中世の心性を「敬虔と宗教性」と定義する⁴。以下の4つの要素の中には心性という言葉は出てこないが、これらを総合的に分析することで、心性を理解することにつながると考えている。

- 1) 世界像に関係する要素
- 2) 聖書とキリスト教的世界観
- 3) ギリシア・ローマ時代からの知識
- 4) 近代的な地図としての整合性

3 解説

次に、地図に描かれた情報をそれぞれの要素に従って分析、解説を行う。

3-1 世界像に関係する要素

ヘレフォード図には地図の外側上部に最後の審判の様子が、外側左下方部にはアウグストゥスが部下に対して世界を計測するようにと指示を出し、それに従った三人の賢者が描かれている。外側右下方部には旅人が描かれており、これは地図作成者の似姿であるという⁵。このように、この地図にはキリスト教・ローマ帝国・作者に囲まれた円の中に伝統的なTO図の枠組みに従って「世界」が描かれている。TO図は中世において地図作成の基本的枠組みとなった形である。アジア・アフリカ・ヨーロッパという区分はプリニウスにも見られるが、その

形にキリスト教的な意味づけが施されたものが中世の TO 図である⁶。ヘレフォード図の枠組みは伝統的ではあるが、そのなかの情報は十字軍の遠征結果を踏まえて更新されている。

地図の左下はヨーロッパである。外枠としてブリテン島周辺、イベリア半島、イタリア半島、アドリア海などが描かれているが、ブリテン島以外の形は不正確であり、北欧も不明瞭である。内陸は、主な河川・都市が描かれているが、イギリスからイタリア半島に至る一帯は詳細で、そこから外側に向けては情報量が減少しており、都市の位置関係の描出も稚拙になる。

アジア地域には、北側から中国、インド、ペルシア湾出口にはセイロン島が描かれている。内陸には、サマルカンドなどの交易都市や、中東の都市、インドの河川などが描かれており、その位置関係はヨーロッパ周縁部同様曖昧さが残る。TO 図の区分に従えば、ナイル川とヴォルガ川以東が広義のアジアであるが、ヘレフォード図では、アフリカとの境は、ナイル川と紅海・ペルシア湾付近に求められる。

アフリカは地図上の空白が目につくが、原図ではこの場所には数多くの説明文が書き込まれている。本来地中海沿岸にある都市がアフリカ内陸に描かれていることから、この地域の情報はあったものの、実際の距離感については不明確だったことがわかる。また、他の中世の地図と同様にアフリカ大陸には2本のナイル河が描かれている⁷。

三大陸の外側の海は、TO 図の様式に従い、オケアノスと理解できる。ジブラルタル海峡にはヘラクレスの柱が描写されており、ここが既知の世界と異界とを分離している。アフリカの外海に描かれている島は幸福島で、現在のカナリア諸島に比定されている⁸。

以上の情報から三大陸を比較すると、情報の正確さではヨーロッパが圧倒的で、しかも西ヨーロッパの情報量が秀でていることが理解できる。ここから既知のヨーロッパと未知のアジア・アフリカという対比や、ヨーロッパの人々の世界の広がりが見える。

3-2 聖書とキリスト教的世界観

岡崎はアジア地域の一部をバイブル・ランドと呼ぶ⁹。確かに、アジア地域には旧約聖書に従った図像が多く描かれていた。ここでは授業で取り上げることが可能であろう代表的なものについて言及する。授業を通して生徒が特に注目していたのは、エデンの園 (Paladise)¹⁰、ノアの方舟 (Noah's Ark)¹¹、バベルの塔 (Tower of Babel)¹²、イェルサレム (Jerusalem)¹³であった。イェルサレムは地図全体の中心としても描かれているので、聖書の理解に基づいたイェルサレムの重要性が確認できる。これらはほぼ直線上に描かれているので、比較の見つけやすい関係にある。また、出エジプト (Rout of the Israelites of Egypt)¹⁴やベツレヘム (Bethleem)¹⁵も注意を促すと気がつく生徒が多かった。他に教科書の範囲に従って注目可能な場所は、五本山やサンティアゴ・デ・コンポステラ、ローマ、イェルサレムの巡礼地であろう。

その他にも聖書に基づく図像が数多く描かれている。地図の枠外には最後の審判も描かれているので、これらを踏まえると、地図でありながら地図全体として聖書に基づいた人類の歴史も表現していることがわかる。これらは聖書に描かれている普遍史の再現であり、近代的な地図からは排除された要素である。

3-3 ギリシア・ローマ時代からの知識

さて、アジア・アフリカ地域は情報が少ないこと、また、聖書など我々が思う「事実」以外の情報が書き込まれていたことが確認されたが、聖書以外の書き込みの情報源として神話と書物が考えられる。これらは不可分の関係であることが多い。『博物誌』など古代の研究の集大成とされる書物には、信頼できうる情報と、神話や伝承など信憑性が疑われるものが混在している。地図にもそれらの情報が混在する形で書き込まれていた。彼らは両者を区別することがなかったように思える。また、交易に携わった商人が情報をもたらしたことも考えられる。しかしこのような見聞の知識も文字化されていることがあるので¹⁶、ここではこれらも含めて書物から得る情報をまとめた。

中でも特異に映るものについて取り上げると、アジアに描かれた生物としてはマンドレイク (Mandrake)、サラマンダー (Salamander)、ドラゴン (Dragons)、フェニックス (Phoenix)などが挙げられ、アフリカにはユニコーン (Unicorn)、バシリスク (Basilish)、スフィンクス (Sphinx)、ケンタウロス (Centaur)などが描かれている。人の描写に目を転じると、アジア周辺部はパノティイ (Phanesii)¹⁷、ヒッポポデス (Hippopodes)¹⁸、スキアポデス (Sciapod)¹⁹、アリマスピ (Arimaspi)²⁰、エッセドネス (Essedenes)²¹、スキタイ²²が描かれている。エデンの園の真西にも、巨人 (Giants)²³、アマゾン (Female soldier)、ピグミー (Pygmies)²⁴、ガンギネス (Gangines)²⁵が描かれている。アフリカには、アンバリ (Ambari)²⁶、スキノペデス (Scinopedes)²⁷、口細人²⁸、ヘマルフィロディア (Hemaphrodites)²⁹、ヒマントポデス (Himantopodes)³⁰、プシュリ (Psylli)³¹、ブレムミュアエ (Blemyes)³²、トログロデュテス (Troglodytes)³³、ガンギネス (Gangines)³⁴、アグロパギ (Agriophagi)³⁵など数多くの驚異が描かれて

いる。

このように、アジア・アフリカは怪物的な人間が多く描かれ、ヨーロッパから遠くなればなるほどその頻度は高くなる傾向にある。前述の通り、これらの多くは信憑性が疑われる情報であるが、その情報は中世を通して知的に再生産され利用されてきた。歴史的に見ると中世はもっとも「驚異の書」が再生産された時代である。応地によれば、古地図の不完全さも含めて意味のあるテキストとして読み解こうとする研究方法があるというが、この立場に立てば、このように地図が荒唐無稽であるほどそれを生み出した背景を考察する意味が生じることになる³⁶。

3-4 近代的な地図としての整合性

地図全体を概観することで、近代的な意味で地図として成り立っている地域（ヨーロッパの一部・地中海）と、地形図として成立していない地域（アジア・アフリカ）があるのは理解できた。ヨーロッパの一部が詳細なのは、そこが、地図を描いたブリテン島の人々にもっとも近接した世界であったからであろう。この世界は、イギリスからフランス、その先のイタリアまで広がっていたと考えられる。これは中世の交易圏の広がりとも重なると考えられる。人とともに情報も動き、結果としてこの地域の情報は多い。

イギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの4つの島と地域が描かれ、それぞれ、都市の位置、川の流路、山の位置などが詳細に描写されている。また、ウェールズの描写からこの地図の作成年代が推定された³⁷。しかし、同じヨーロッパでもレコンキスタ中のスペインや東ヨーロッパの情報量は少なく、ほぼ同時代に発生したポルトガルの建国が書き込まれていないなど、情報伝達の難しさも垣間見える。

次に、地中海沿岸から小アジアにかけての地域の描写も詳しい。これは、十字軍活動の結果、中東の詳細な情報もたらされたことによる。ヨーロッパほど詳細ではないが、海岸線の形や、ボスフォラス・ダーダネルス海峡、黒海などコンスタンティノープル付近の海の様子が具体的に書き込まれている。この情報の結果、ヘレフォード図は伝統的な TO 図の形をゆがめることになった。それは、作者が形式よりも事実を優先したことに他ならない。

近代的な地図としての整合性と限界を確認するため、次にクレタ島に注目する。地中海のクレタ島付近を見ると、クレタ島は本来の大きさ・形からは逸脱しているものの、あまり外れていない場所に描かれていることがわかる。しかし、ギリシア神話に従って島内に迷宮が描かれ、島の左右にはカリュプティスとスキュラという怪物が描かれている。

実在しない生き物が描かれていることは、未開や後進性の象徴のように思えるが、それらも原典である神話には忠実に描かれている。ここから、イギリスの正確さも、3-3で述べた様々な驚異も、どちらも根拠や原典に忠実に描こうとした作者の姿勢が伺える。

4 提示の方法

読図に際しては、A2程度の大きさの古地図のポスターを班ごとに配布した。それでも生徒は小さいと感じていた。実際の地図は1.3mほどなので、実物大に拡大すると使いにくい。もう少し大きな地図を用意するか、手で拡大・縮小が可能な電子資料として生徒に提示した方がよかったと感じている。

5 総括

以上の分析をもとに、2つの研究授業を実践した。第一は「西ヨーロッパ世界の拡大」の単元で、十字軍を扱う際に古地図での位置関係からエルサレムの重要性を体感し、十字軍の意義を考えた³⁸。二つ目は「西ヨーロッパ中世の文化」の単元で、中世の心性を考える際に利用した³⁹。それぞれの実践は紙面の関係で割愛せざるを得ないが、詳細についてはそれぞれの発表を参照していただきたい。

TO 図には聖書の記述が多くあることから、聖書についての知識があったほうが読図にはよいかと予測していたが、実際に授業を行ってみると聖書の記述よりも TO 図の形や不可解な生き物に注目している生徒が多かったようだ。むしろ、これらの要素に注目させることで広く利用可能であることが推察された。

参考文献一覧

- ・ Alington, G., *The Hereford Mappa Mundi a medieval view of the world*, Gracewing Books, 1996
- ・ Harvey, A., *Mappa Mundi, Hereford Cathedral*, 2002(1st published 1996)
- ・ Harvey, P.D.A.(ed.), *The Hereford World Map*, British Library, 2006
- ・ ウィルフォード・J.N., 『地図図を作った人びと』改訂増補版(鈴木主税訳)河出書房、2001
(Wilford, J.N., *The Mapmakers(revised)*, 2000)
- ・ 荒井雅子「古地図を利用した中世世界の再構築」『日本社会科教育学会 全国大会発表論文集』第6号、pp.70~71、2010
- ・ 荒井雅子「中世ヨーロッパの心性を理解するための授業実践」『社会系教科教育学会 第22回研究発表大会発表要旨集録』pp.92~93、2011

- ・応地利明『絵地図の世界像』岩波書店(岩波新書)、1996
- ・応地利明『世界地図の誕生』日本経済新聞出版社、2007
- ・岡崎勝世『聖書vs.世界史』講談社(講談社現代新書1321)、1996
- ・岡崎勝世『世界史とヨーロッパ』、講談社(講談社現代新書1687)、2003
- ・プリニウス『プリニウスの博物誌』(中野定雄・中野里美・中野美代訳) 雄山閣、1986
- ・ハンス＝ヴェルナー・ゲッツ『中世の聖と俗 信仰と日常の交錯する空間』(津山拓也訳) 八坂書房、2004
- ・松平俊久著、蔵持不三也監修『図説ヨーロッパ怪物文化誌事典』原書房、2005
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領』2004
- ・『新共同訳 聖書』日本聖書協会

参考資料

ヘレフォード大聖堂発行 Poster of Mappa Mundi in English translation

注)

- 1 ウィルフォード『地図を作った人びと』河出書房、2001、第4章を参照。
- 2 イギリスのヘレフォード大聖堂に残る、現存する中では中世最大の TO 図。作成年代は1300年前後と推定されている。今回の研究には19世紀に複製された英語版を利用する。
- 3 岡崎勝世『世界史とヨーロッパ』講談社、2003、p72
- 4 ハンス＝ヴェルナー・ゲッツ『中世の聖と俗』八坂書房、2004、pp.136-137
- 5 Harvey, A., Mappa Mundi, Hereford Cathedral, 2002(1st published 1996), pp.45-46
- 6 三大陸の構成については、プリニウス『プリニウスの博物誌』p138を参照。中世的な TO 図の意味については、例えば岡崎勝世『聖書 VS.世界史』講談社、1996、p78を参照。
- 7 プリニウス、同書、p219。応地『「世界地図」の誕生』日本経済新聞出版社、2007、pp.100-101
- 8 この関係については、応地、同書、pp.98-99を参照。幸福島の記述については、プリニウス、同書、p289を参照。
- 9 岡崎、前掲書、p81。応地は同様に「地上の聖地」という表現をしている。彼によれば、伝統的な三大陸の構成の中に、楽園追放から現在に至るまでの歴史が、東から西に順番に描かれているという。第Ⅱ帯と呼ばれる旧約聖書の物語が主に描かれているのが、アジア地域である。
- 10 地図の上方に置かれ、アダムとイブ、リンゴの木と蛇と楽園から流れる4つの川が描かれている。
- 11 ノアとその妻、三人の息子と動物達が描かれている。
- 12 バビロンという地名の記載の下に、三重の高い建物が描かれている。
- 13 ゴルゴダの丘の記述とともに、円形の城壁を持つ聖地として特殊な描かれ方をしている。地図作成当時は、ムスリムが支配する3つの宗教の聖地であった。
- 14 エジプトからイエリコまで、途中紅海を渡り、シナイ山でモーセが十戒を授かり、荒れ野を放浪しエリコに至る道筋が描かれている。幕营地として、スコト、エタム、ミグドルの地名あり。
- 15 ゆりかごと厩で表現されているのは、イエスが厩で生まれたという記述から。
- 16 いわゆる『東方見聞録』がよい例。プリニウスにも以下のような記述があり、実情を知る(しかし正確には知らない)人からの情報をもとに書かれたと思われる。「最初の間居居住者はセレス人<中国人>と呼ばれ、森から得られる毛織物で有名だ。」(プリニウス、前掲書、p258)
- 17 耳たぶが大きくその耳で全身を覆うとされた。モルッカ諸島やスキタイに住むと言われた。長耳人とも。
- 18 岡崎(2003)には馬足人との訳出があるが、詳細は不明。
- 19 インド付近に住むという大足の怪物的な人間。一本足でありながら驚くべき速度で走り、脚を頭上に上げて日よけにする。
- 20 一つ目の戦士。グリフィンと戦い、グリフィンが守っている黄金を奪うという。
- 21 親の死に際し、その肉を食した。遺骸が虫に食べられるより、自分達が食べたほうが死者の名誉になると考えていた。
- 22 アジアにいとされた好戦的な民族で、一部は食人種とされた。
- 23 頭が犬の巨人。犬頭は、怪物の描写の中では好んで描かれるモチーフだった。
- 24 アストミの住む彼方の山岳地帯に住むという小人。「・・・ガンジス河の南に当る地域では・・・このプラシイ族の山地には小人族がいるという。」(プリニウス、前掲書、p261)
- 25 野生のリンゴの匂いをかぐだけで暮らしている人。リンゴが悪臭を放つと彼らは直ちに死ぬという。
- 26 耳がなく、足がよじれている。
- 27 岡崎(2003)には隻眼隻脚人と訳出されているが、詳細不明。
- 28 「小さな口を持った人」という記載を訳したと思われ、プリニウスの以下の記載と同等と考えられる。「またある種族は口が塞がっており鼻孔もないが、ただひとつの孔があって、それを通じて呼吸をしたり、カラスムギのわらを用いて飲み物を吸い込み、そこに自生しているハダカムギの粒を食物として吸い込む。」(プリニウス、前掲書、p286)
- 29 両性具有者。
- 30 「ヒマントポデス族は足が革紐のようで、歩く代わりに匍う(はらばう)のがその性質だ」(プリニウス、前掲書、p128)
- 31 生まれた子を蛇に与え妻の貞操を試すという。
- 32 リビア砂漠に住むとされた食人種。頭がなく、口と目は胸についている。
- 33 「洞窟を掘って住居としている。彼らはヘビの肉を食べて生きており、声をもたずただキキキという音を発するだけで、言語による交渉というものは一切ない。」(プリニウス、前掲書、p217) また、野獣の背に乗りこれを捕らえるという。
- 34 アジアにも同じ名前が出てくるが、同一の生物がアジアとアフリカに生息するという記述は意外と多い。どちらもヨーロッパにとって同じように驚異の地であったことが類推される。このガンギネスの描かれ方はアジアのそれとは違いますが、理由は不明。
- 35 民族名は異なるが、エチオピアについてのプリニウスの以下の記述と同じと考えられる。「その次にくるのは全く創造的な地域である。西の方にニグロイ族がおり、その王はただ一つの眼が額にある。」(プリニウス、前掲書、p287)
- 36 応地『絵地図の世界像』p3。彼によれば、古地図の研究の他の可能性とは、これ以外にも、現在の地図を一つの完成型として、そこに至るまでの発達過程として古地図を理解しようというものと、過去の景観を復元するための資料として利用するというものである。
- 37 コーンウェイとカーナヴォンが描かれている。ここはエドワード1世が侵略して建設されたので、12世紀末とわかる。
Harvey, A., op.cit., pp.45-46
- 38 荒井「古地図を利用した中世世界の再構築」『日本社会科教育学会 全国大会発表論文集』第6号、pp.70-71、2010
- 39 荒井「中世ヨーロッパの心性を理解するための授業実践」『社会系教科教育学会 第22回研究発表大会 発表要旨集録』pp.92-93、2011